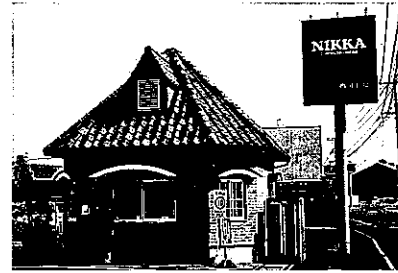


門司工場100年の歴史を振り返る

門司工場 総務部 最首 聡志

門司工場は今年で操業100周年を迎えます。と言っても、ニッカウキスキーの創業が今年で80周年ですから少しおかしくありませんか？
門司工場がニッカウキスキーの工場になったのは平成18年です。それ以前の歴史を紐解くと操業100年の経緯がわかりそうです。これから100年前に遡って門司工場の歴史を見てみましょう。



大里酒精製造所

門司工場は大正3年、鈴木商店が設立した「大里酒精製造所」から始まりました。大正3年は竹鶴政孝翁が単身スコットランドに渡る4年前です。大里（だいら）というのは地名で、現在のJR門司駅は当時「大里駅」という名称でした。今でも工場の住所は北九州市門司区大里元町です。酒精はアルコールのことですので「大里にあるアルコール工場」ということでつけられた名称です。

当時は第一次世界大戦の影響で国内での工業用アルコールの入手が困難になったこともあり、各地に連続式蒸留装置を持つアルコール工場が設立されました。大里酒精製造所も当初は飲用ではなく工業用アルコールでスタートしています。しかしながら、大戦の特需も終息するとアルコールの市況が悪化、アルコール会社の経営は苦難の道を歩むようになります。

操業当初の様子が平山與一さんの「新式焼酎」という書籍に記述されています。

「原料はジャワから輸入した固形糖蜜で、糖蜜と石灰を混交して成型し、竹籠200斤入に梱包してあったが扱いに困ったようである。大正4年春まではアルコールのみを製造しておいたが、その後焼酎製造免許を申請、許可を得て、生切甘藷を原料とする焼酎会社となった。アルコール

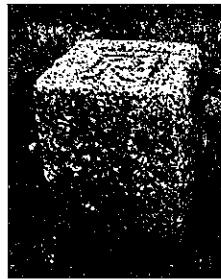
は朝鮮に輸出していたが、蒸留機は明治末期に政府がドイツから輸入したものを鈴木商店が払い下げを受けたものであり、操作方法は手探りであり、アルデヒドの分離もままならず、品質が悪かったようである。」

鈴木商店

鈴木商店の発祥は明治7年に鈴木岩治郎が、当時番頭をしていた辰巳屋ののれんわけで神戸に開業した砂糖商店です。鈴木岩治郎が亡くなった後は岩治郎の妻鈴木よねが、金子直吉と柳田富士松の両番頭に経営を委託し更なる発展をとげ、大正6年の絶頂期には鈴木商店の売上は15億円に達し、この額は三井物産（10億）や三菱商事を遙かに上回っていました。（幻の総合商社鈴木商店 桂芳男著）また、当時のスエズ運河を通過する船の割は鈴木商店所有といわれました。

門司工場には鈴木商店の歴史遺産で「境界杭」が残っていますが、境界杭には辰巳屋の「辰」という記号が記されています。

鈴木商店は昭和の金融恐慌の影響で倒産してしまいますが、その商社部門は「日商」という社



Column

鈴木商店と竹鶴政孝

竹鶴のサクラメント滞りは、一か月ほどで打ち切られた。英国では秋から新学年が始まるというから、急がなければならぬ。サクラメントからは鉄道でロッキー山脈を越え、ニューヨークへ向かった。
列車には一人の日本人が乗り合わせていた。鈴木といいます、とこの青年は名乗った。青年は列車の中で一通の電報を受け取った。

「すぐに帰らなれません。米騒動が起こるとるちゅうこと聞いて心配しとりましたが……。家がどうやられよって洋行どころではあらしまへんのです」
青年は大戦景気で急成長した神戸の鈴木商店の長男だった。米騒動の打ち壊しにあつて、家も商売も危ないらしい、と沈痛な面持ちで語る鈴木に、竹鶴は慰めの言葉もなかった。
【ヒゲのウキスキー誕生す】 川又一英 著

名で存続し、日商岩井を経て今では双日として継承されています。

日本酒類醸造から大日本酒類醸造へ

話は、大里酒精製造所に戻ります。工業用アルコールの需要が減退した際に鈴木商店が目をつけたのが焼酎です。もちろん、他の国内のアルコール工場も焼酎製造に転換したという記録があります。

当時は大戦景気で焼酎の需要が高まっていました。鈴木商店は、大里酒精製造所よりも早い明治41年に四国宇和島で設立された日本酒類醸造が製造していた新式焼酎「日の本焼酎」（現在の甲類焼酎）の将来性に目をつけ同社を買収、大里酒精製造所と合併し社名を「日本酒類醸造」としました。自らも鈴木商店の基本商標であるダイヤ印を冠した「ダイヤ焼酎」を発売、全国に特約店配置し販売しました。（写真：日本酒類時代のダイヤ焼酎の甕）

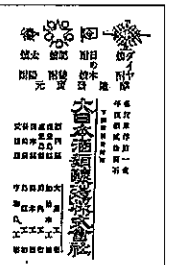


「日の本焼酎」は、日本で最初の甲類焼酎と言われており（蒸留酒造組合HP）、その品質の高さから、人気が高く、他社はその品質をまねてき

なってきたと言われています。日の本焼酎を作っていたのは、後に寶酒造の社長となる大宮庫吉でした。鈴木商店の買収の目的は大宮庫吉にもあったのですが、残念ながら会社の合併の後、四方合名会社に腹心の部下とともに移られてしまいます。四方合名会社は大正14年に寶酒造となり、あるときはライバルとして、またあるときは協和発酵工業の設立に共に関わるなど、現在に至るまで色々な関係が続きます。

その後も、鈴木商店はアルコール工場を新設、買収して勢力を拡大していきます。大正7年には鹿児島に工場を建設。この工場は「さつま司」と同じ加治木にありました。その後は、不景気になった影響で焼酎会社の経営が行き詰まり、合併による生き残りが模索されます。大正14年、日本酒類醸造と肥後酒精（熊本）、大日本酒類醸造（鹿児島）の3社が合併し、大日本酒類醸造となりました。門司工場は、大日本酒類醸造株式会社においても主力工場として位置づけられています。（昭和3年の新聞広告：鹿児島工場資料下の部分）

昭和3年には更に合併します。九州醸造（鹿児島県出水郡阿久根町）、西海醸造（天草郡本戸村）、大日本製酒（古賀町）、日向醸造（宮崎県宮崎郡清武村）、丁子屋長浦



門司工場の歴史

1914 大正3	1915 大正4	1917 大正6	1925 大正14	1928 昭和3	1944 昭和19	1948 昭和23	1960 昭和35	1977 昭和52	1982 昭和57	1984 昭和59	1985 昭和60	1990 平成2
鈴木商店が「大里酒精製造所」を創立。アルコールの製造開始	焼酎の製造免許取得	日本酒類醸造(株)となる	九州の同業3社（肥後酒精(株)、大日本酒類(株)、島原西肥興行(株)）を合併し大日本酒類醸造(株)となる	九州の同業6社（大日本製酒、九州醸造、江口醸造所、柳丁字屋商店長浦工場、日向醸造、西海醸造）を合併	大日本醸造工業(株)に名称変更	日本酒類(株)に名称変更	協和醸造工業(株)と合併し協和醸造工業(株)門司工場となる	むぎ焼酎「玄海」発売	原料アルコールタンク850KL完成	むぎ焼酎「不知火」発売	焼酎「大五郎」発売	ミニペット充填設備完成ミニ二五郎発売 原料用アルコール製造設備廃止

1991 平成3	1992 平成4	1993 平成5	1994 平成6	1995 平成7	1996 平成8	1997 平成9	1998 平成10	1999 平成11
「玄海」リニューアル本格焼酎となる	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」優等賞受賞	紙バックライン充填設備完成	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」優等賞受賞 製品立体倉庫完成	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」優等賞受賞 「特撰のか」発売 包材立体倉庫完成	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」優等賞受賞 泡盛製造開始	焼酎蒸留排水濃縮装置完成	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」優等賞受賞 新フレンドセンター完成	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」優等賞受賞 ISO9001認証取得

工場（長崎県西彼杵郡長浦村）を合併し大日本酒類醸造が存続会社となりました。九州を拠点とする一大焼酎製造会社となったのです。しかしながら企業合併の運命が、多くの工場はその後廃止・閉鎖となっていますが、幸いにして門司工場は主力工場として引き続き操業を続けました。

協和発酵工業からニッカウヰスキーに

大日本酒類醸造は協和発酵工業の設立に関係しています。協和発酵は、寶酒造、合同酒精、大日本酒類醸造の3社が合同で設立した、協和化学研究所の加藤辨三郎（寶酒造から出向）が、そこで開発した航空燃料を発酵法で作る技術を実用化するために設立した東亜化学興業株式会社が母体です。同社の設立時の出資比率は、東洋紡50%合同酒精15%大日本麦酒15%大日本酒類醸造2.5%寶酒造2.5%となっていました。大日本麦酒も出資していました。戦後、協和産業という社名を経て、昭和24年に協和発酵工業となります。その後、協和発酵は昭和23年に大日本酒類醸造から社名を変更していた日本酒類を昭和35年

に合併します。この時に協和発酵の門司工場となるわけですが、設立時に投資していた協和発酵に買収されるというも何かの運命を感じます。

協和発酵時代には、連続式蒸留焼酎や清酒の製造、調味料の製造など、現在の門司工場の役割とは違った事業も営まれていましたが、ここでは乙類焼酎について見てみましょう。

門司工場が乙類焼酎を作り始めたのは昭和42年で、熊本工場の閉鎖に伴い乙類製造免許が移転されてからです。当初は、もろみ取り焼酎、清酒粕取り焼酎を造っていたという記録が残っています。乙類甲類ブレンドむぎ焼酎「玄海」を発売したのが昭和52年でした。「玄海」は平成3年に、乙類ブームにのり乙類焼酎となりましたが、販売は苦戦しており、その時に開発されたのが「かのか」です。乙類100%にこだわらず、飲みやすい焼酎というコンセプトで開発され、平成5年に発売されました。この商品が現在の門司工場を支えています。

大里酒精製造所から続いていた連続式蒸留機での製造は平成6年まで継続してきましたが、効率化のため蒸留機は他の工場に移設されます。大正時代から続いた連続蒸留焼酎の歴史は、ここで途切れることとなりますが、その後は本格焼酎を主に製造することになりました。

平成14年9月に協和発酵が酒類事業をアサヒビール社に譲渡したとき、門司工場は協和発酵の土浦工場とともに分社化され、アサヒ協和酒類製造株式会社となりました。その後平成17年9月に協和発酵が出資を引き上げ、100%アサヒビールの出資会社となり、その後、平成18年1月に、同じアサヒビールグループの蒸留酒会社であるニッカウヰスキーと合併、ニッカウヰスキー門司工場となりました。

現在は、本格焼酎（麦、米、そば）や梅酒の原酒製造と貯蔵・混和、また各種容器へのパッケージングが門司工場の主な機能です。大里酒精製造所から100年、これからも新しい門司工場の歴史を刻んでいきます。

Column

鈴木商店の破綻と門司工場

鈴木商店は、昭和2年に倒産するが、門司工場（大日本酒類醸造）の運命はどうなったのであろうか？記録によると、鈴木商店の系列下にあった大日本酒類醸造は幸いに、熊本税務監督局の納税保証物関係に対し寛大なる措置と経営陣の対策、そして全国ダイヤ焼酎特約店の絶大なる支援と協力によって危機を突破し存続した。（新式焼酎 初期の時代における九州 平山与一著より）当時、大日本酒類醸造の株式はすべて台湾銀行に担保として差し出されており、さらに台湾銀行から日本銀行に預けられていた。

門司工場操業100周年が意味すること



仙台工場 副工場長
長谷川 裕寿

門司工場の始まりは、神戸の総合商社である「鈴木商店」が作った「大里酒精製造所」であり、その操業開始は1914年の1月になります。「鈴木商店」は、第一次世界大戦期に急成長し、帝国人造絹糸や神戸製鋼所や豊年製油など50社とも60社とも言われる企業を傘下に収め、絶頂期には三井・三菱を凌駕するほどの売上げを誇りました。

「大里酒精製造所」は、その後、吸収・合併と社名の変更を繰り返し、1960年には協和発酵の門司工場に、2002年にはアサヒ協和酒類製造の門司工場に、そして2006年にはニッカウヰスキーの門司工場となり、現在に至っています。

「鈴木商店」は、門司の大里一帯に工場群を建設しており、「大里酒精製造所」はアルコール製造の原料である糖蜜・酵母・ふすまをそれぞれ隣接する大日本精糖・帝国麦酒・大里製粉から調達でき、かなり効率的にアルコールを製造し

ていたと推察できます。門司工場は、その「大里酒精製造所」のアルコール製造技術を、例えば、焼酎造りや清酒造りに、最終製品の形を変えながらも、1世紀にわたり、連続と受け継いできたこととなります。

一流企業がいとも簡単に消え去ってしまう世の中の変化が極めて激しい中、今年100周年を迎えられることは素晴らしいことでもありますし、また、門司工場の変化への柔軟性の高さや懐の深さの証明でもあると思います。今後も、100年という歴史に裏打ちされ、100年という時に培われた技術と文化と伝統を守りつつ、その一方で、挑戦と独創による技術革新を立ち止まらずに進めてほしいと思います。そして、歴史の重みに恥じない、門司工場としての矜持を持って、お客様に愛され続ける「お酒」を造り続けてほしいと思います。

門司工場100周年によせて



生産管理部
加藤 太郎

操業100周年おめでとうございます。この間、私がいた期間は2年にも満たないものですが、今でもすばらしい思い出となっています。赴任のとき初めて門司工場を訪れたわけですが、関門海峡を行き来する船とその汽笛、レトロな工場レンガ倉庫を背景に咲くピンクのコスモスが今でも忘れられません。

門司工場のすばらしさは何といってもこの海と山が近い自然環境の豊かさ、人口100万都市北九州を支える利便性、それに歴史、文化のバランスの良さだと思います。

鈴木商店大里酒精製造所からニッカに至るまでの100年間の系譜を見ると、その間に何と8回

も会社名称が変わっているとのこと。最長が1960年からの協和発酵で42年。それまでの焼酎・アルコール業界の競争がいかに激しかったかが良くわかります。こんな環境変化の中でも門司工場が生き残ることが出来たのは地の利に加えて人の技があったからで、それが焼酎のオンリーワン技術であるLKなどに結びついているのだと思います。

ニッカでは北の余市から南の門司まで7工場あり、それぞれに異なった役割を持っています。ぜひ、他の工場との交流を盛んにして、良いところを吸収してオンリーワンの技術をさらに高められることを期待しています。

2000	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	
平成12	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	
「穂の舞」発売	「吟風玄海」発売 「米かのか」発売	「玄庵」発売	「うみそら」発売	「豊醇玄海」発売 「綺羅麦」発売	「玄庵」優等賞受賞 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門 「玄庵」優等賞受賞 新品質管理棟完成	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門 「玄庵」優等賞受賞 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門	福岡国税局鑑評会本格焼酎部門 「玄庵」優等賞受賞 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門	ガスボイラー完成燃料転換煙突撤去 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門 「玄庵」優等賞受賞	市水受け入れタンク更新 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「大地の穂」金賞受賞 「玄海」も金賞評価だったが、表彰は各社一つの規程により表彰なし	北九州の潮流発電実験機を棧橋横に設置。 実験に協力 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門 「玄庵」金賞受賞	福岡労働基準協会連合会より 「倉田賞」受賞 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」金賞受賞 （大地の穂）も金賞評価だったが、表彰は各社一つの規程により表彰なし	焼酎マイブレンドスタート 福岡酒造組合鑑評会「玄庵」 福岡県議会議長賞受賞「吟風玄海」 「玄海」「不知火」「穂の舞」金賞受賞 福岡国税局鑑評会本格焼酎部門「玄海」金賞受賞 （大地の穂）も金賞評価だったが、表彰は各社一つの規程により表彰なし